

平野 馨先生と学生相談の発展

林 潔 (白梅学園短期大学)

文部省(現在 文部科学省)の建物の裏手に、国立教育会館の建物がありました。一階に大きなホールがあって、教育関係の催しが開催されます。

平野先生と初めてお目にかかった場所です。

わが国の、カウンセリング、心理療法の発展にはいくつかの潮流があります。そしてそれぞれが、相互に影響を与えながら発展して今日に至ります。

その一つで、戦後のわが国のカウンセリングの発展に大きく寄与したのが、SPS (Student Personnel Services (注1))の流れをくむ、学生相談研究会の活動です。

学生相談研究会は1962年より、高等教育機関を対象として全国学生相談研修会を開催して、今日に至ります。平野先生はこの両者で、指導的な役割を果されてきました。初めてお目にかかったのは、この研修会の会場です(注2)。

特に1970年と71年とは慶應義塾大学が研修会の主催校でした。この1970年にはDr. W. P. Lloydと行動カウンセリングのDr. J. D. Krumboltzが、1971年にはガイダンスのDr. E. G. Williamsonが招聘講演を行っています。

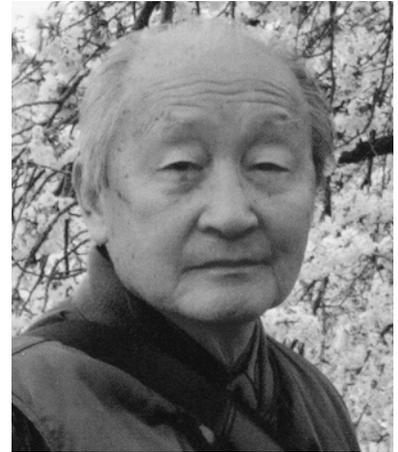
また1987年には準備委員長として慶應義塾大学で日本学生相談学会第5回大会を主催されました。そして、この学会の第3代の事務局長を務められます。このように、ご所属の慶應義塾大学の学生相談室とあわせて、長年にわたり、特に学生相談の領域で指導的な役割を果されました。

「慶應の相談室では、ケースカンファレンスには医者を入れるんですよ」。一般にカウンセリング関係の場に、医師の参加を求めるのは難しい時代でした。ご所属の環境とあわせて、心理だけではなく医療の支援も求めようというご努力のほどがうかがえます。

相談事例と、学生をとりまく心理・社会的背景からの、学生像の一端として、次のように述べておられます。

進路問題:内容は一方では自己啓発的動機から各方面の情報や手続き上の質問・資料を求めてくる場合と、他方表面的には同様の質問をして、その対応をみながら一種の相談への入場券としていて、話しやすさが感じられるとその底にある問題が現れてくる。「授業に興味湧かない」「入学したが、この大学になじめない。退学して出直そうかとも思うが決断がつかない」などに代表される「転部・再受験症候群」である。このようなタイプには大学進学に際し、「偏差値」と「親の希望」が著しく影響していて、本人の希望が二の次になった結果によるケースが多い。

進路問題の根底には「不本意入学」「無目的」「しらけ」のような屈折した感情がある。大学に入学することが目的化、偏差値を少しでも上げる努力をし続けた結果エネルギーを使い果たし、同時に先への意欲も失った「燃え尽き現象」で、努力の甲斐なく希望校に入学できなかった場合はその落差は非常に大きい。高校で



平野 馨 先生

はトップにいて注目されていたのが、大学では誰もそのようには見てくれず、自分でも頭の切り替えができずに劣等感や自己嫌悪ばかりが膨らんでしまうことになる。

対人関係：仲間とどうつきあうかの困難さ 人との距離のとり方の問題。大学の広くとりとめのない環境の中で手掛かりを失ったと感じたとき、孤立感のために周囲がすべて自分に背を向けているように思えてしまう。大学は面白くない、人に対する不信感を募らせる。耐性（トレランス）が弱く、いきなり挫折感を持ってしまう。

生活面での問題：流されて、流されて目的がないままに入学してきたり、周囲からいわれるまま押し上げられてきた、皆がそうするから自分も従ってきたなどのように、入学以前から問題の火種を抱え、入学後も不全感が残った状態の諸君には、学科目、専攻、課外活動に興味が持てず、かといって他のことも手がつかない状態で、漫然と家と大学の往復が日課の生活になり、ひとり所在なくいたりすると駅や路上で声をかけられる。

そして最後に、これからの学生相談活動として大学側のリソースと学生側のニーズとが交わる場所として、相談機能を集約したセンターの設立をまずあげておられます。ここで大きな役割を果たすものが、慶應で力を入れておられたSC（スチューデント・カウンセラーズ）です。SCは、学生が同じ学生の立場で行う援助・相談活動とそれを行う学生団体の名称です。そして、第二には、対人関係技法としてのカウンセリング・心理療法、集団力学といった、正課にはないような課外活動を盛んにすること。慶應では、学生合宿研修に力を入れておられます（平野，1985；1991）。

特定の大学への入学を目的として、入れそうな学部を選ぶ。特に推薦では、「そこに入れるなら、学部はどこでもいいじゃないか」という、特に周囲の意図に引きずられて入学し、専攻をめぐってこんなはずではなかったと悩む。しかるべき大学では、転部や五月病の問題が、特に課題となっていた時期でもありました。

ある学会で私の発言について、相手が怪訝な態度をとりました。そのとき、先生は「林はこういう点を懸念して言ったのではないか」と穏やかにフォローしてくださいました。このことが、先生の印象として残っております。

慶應ご退任のあと、水戸の常磐大学短期大学に赴任されました。私も常磐大学に非常勤で伺っておりましたので、キャンパスでたまたまお目にかかりました。その時にご挨拶をしたことが、先生と直接お目にかかった最後となってしまいました。

カウンセリングの活動も、初期にはいろいろな、誤解や批判あるいは非難もありました。

「カウンセリング。なに？ それ？」

「今はやりの、アメリカ文化」

「病気の人、弱い人が行くところ・・・」

「そこまでして、学生を甘やかす必要はないよ」

「学生の牙を抜く手段である」

カウンセリングには、意思決定への援助と、こころのケアという視点があります。先生は、この二つをバランスよく進められていたのではないかと思います。

困難も伴う初期の時期を切り拓き、カウンセリング、学生相談とそのシステムの基礎を築かれた、先駆者のお一人を思い浮かべます。

ご経歴

1953年 慶應義塾大学経済学部卒業

1955年 慶應義塾大学学生部勤務

1968年 慶應義塾大学学生相談室カウンセラー

1991年 常磐大学短期大学教授

1971年～83年 日本応用心理学会事務局幹事

業績例

平野馨 1972 カウンセリングの理解のために 民主教育協会

平野馨 1985 カウンセリング概説 東京布井出版

注1 厚生補導活動。

注2 1955年設立。のち、日本学生相談研究会と改称。現在は日本学生相談学会。当時の研修会のマネジメントおよび講師には、声の大きな京大の石井完一郎先生。中村弘道，澤田慶輔，杉溪一言，小林純一，松原達哉，中澤次郎，福原真知子，平木典子先生などがおられました。中村先生は、のち日本応用心理学会相談部会会長。部会が独立して、日本相談学会（現在、日本カウンセリング学会）初代理事長です。

参考・引用文献

平野馨 (1985). 学生合宿研修の在り方 大学と学生, 234, 7-11.

平野馨 (1991). 学生相談室からみた学生 大学と学生, 313, 40-45.

日本学生相談学会 (2018). 会員名簿.